宮城教育大学附属図書館　児童図書リーフレット

カムパネルラ

～カムパネルラとは～
宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を込めたものです。

Vol.29　2012年7月号

■ 意味の分からないものを楽しむ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・内山　哲治
■ トリックスター登場・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・藤田　博
■ 転校生がやって来た！・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一條　亜紀子
■ 友達を作ることの大切さを教えてくれるこの一冊・・・・・・・・・・・・・・中野渡　陽子
■ 新刊紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・藤田　博

■意味の分からないものを楽しむ

内山　哲治

わたしは小さい頃から、いろいろな物事の意味を考えるのが好きでした。ただ、保育園でもらう絵本には意味を見い出すことが出来ませんでした。今にして思うと、言葉の世界が絵で限定されていたからのように思います。ですから、子供のころに絵本を読んだ覚えもなく、読んでもらった記憶もありません。こんな私も人の子、自分の子供に絵本を読んでやります。この絵本の世界に、わたしが大学生の時に夢中になった文学や映画と同じ匂い、「意味が分からない」があったのです。ここでは、意味が分からなかった絵本を三冊紹介したいと思います。

一冊目は、ステファニー・ブレイク作・絵の『うんちっち』です。シンプルで可愛いうさぎの子が登場します。この子うさぎはどんなときでも、何を聞いても、たったひとつの言葉しか云えません。その言葉が「うんちっち」です。ある日、やってきたオオカミに子うさぎは食べられてしまいます。その後、オオカミは気分が悪くなって、うさぎのお医者さん（食べられた子うさぎのお父さん）に診てもらいます。うさぎのお医者さんが診察中、オオカミが「うんちっち」としか云わないので、子うさぎを食べたのがお医者さんにばれて、子うさぎは無事助かります。ここまでは分かります。ここから続きがあって、助かった子うさぎは普通の言葉が話せるようになっているのです。お父さんともお母さんともちゃんと話をします。でも次の日、何を聞いても今度は「オナラブー」としか云えないようになっていました。この展開は何？クスッと笑えます。でも、話はどこに向かっている？この状況の放置に何かを含んでいる気がするのです。

二冊目は日本から、谷川俊太郎作・元永定正絵の『もこ　もこもこ』です。これは幼児向けなので言葉も擬音だけ、そのためリズム感があり、明快です。だからこそ、言葉だけで表現しきれない何かを表現している気がします。大人の心には見えない何か。『星の王子さま』（サン=テグジュペリ作）でキツネが云っている、「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。かんじんなことは、目に見えないんだよ」が思い出されます。

最後に、メーテルリンク作の『青い鳥』です。これは考える処多しです。チルチルとミチルが魔法使いのおばあさんに頼まれて、幸せの青い鳥を探す話です。チルチルとミチルは青い鳥を探していろいろな国を訪ね歩くのですが、どこにも居ません。お母さんに起こされて夢から覚めた二人は、最後に自分の家で飼っていたキジバトが青かったことに気づきます。しかし、原作には続きがあります。家に居た青い鳥も逃げて、結局どこかへ行ってしまうのです。えっ、なぜ？幸せは身近な処にあることを云いたいんじゃないの？それも逃げて行くなんて！深すぎます。

大人になって、頭の中を一度ごちゃごちゃにするために、一番手軽なものとして絵本は最適です。自分の中の童心を量ることができます。深い意味があるのかないのか、何年か後にでも意味が分かればいい、そういう絵本の楽しみ方もあると思うのです。

※「うんちっち」／ステファニー・ブレイク作・絵／ふしみみさを訳／あすなろ書房
※「もこ　もこもこ」／谷川俊太郎作／元永定正絵／文研出版
※「青い鳥」メーテルリンク原作／いもとようこ文・絵／金の星社

（理科教育講座）

■トリックスター登場

藤田　博

「わたくしを　もっと　おおきくしてください」、うさぎが神さまにそうお願いをします。「とらと、わにと、さるとを、じぶんのてでころして、そのかわをもってきたら」、神さまが出した条件です。

「とらさん。・・・いまに　すごい　おおかぜが　ふいてきて、わたしたちは　みんな　ふきとばされてしまう　という　はなしです」、そう言って、うさぎは自分の体を木に縛り始めます。「先に」が重要です。そうしての先回りは、とらが「まず、おれを　しっかりと　しばりつけてくれないか」と言い出すのを見越してのこと。そうして、棒で殴り殺してしまうのです。

「いい　おてんきですね。」うさぎはさるに、「わざと　なれなれしく　よびかけま」す。「わざと」は演技、まさしくトリックスターとしてのうさぎのもの。「たいこを　じょうずに　うつものが　いなくて、よわっているところです。・・・あなたなら　きっと　すてきに　うまく　たいこが　うてると　おもいます。」お世辞を言われ、うれしくなったさるは、うさぎと一緒に行くことにします。途中、眠ってしまったさるを棒で。こうしてうさぎは、とらとわににつづき、さるをやっつけるのです。

やっつけてくるのがわかっていた、それが神です。だからこそ先回りをし、大きな体をうさぎに与えなかった神こそは、一番のトリックスターと言えるのかもしれません。「たった　ひとところだけでも　おおきくしてやろう」、神さまはそう言って、うさぎの耳をつかみ、遥か彼方へと投げるのです。北川民次・文・絵『うさぎのみみはなぜながい』（福音館書店）が語るメキシコの起源説話です。

あまんきみこ・文・二俣英五郎・絵『きつねのおきゃくさま』（サンリード）では、きつねの前に「おきゃくさま」がやってきます。「ふとらせてから　たべよう」、そう考えるのはきつねの余裕のなせる技。先へと送ったことが、思わぬ結果をもたらします。「やあ　きつねおにいちゃん」、ひよこから掛けられたこの一声、つづいて生まれて初めて「やさしい」と言われたきつねは、「すこし　ぼうっと　なっ」てしまうのです。結果として、ひよこは、トリックスターとしてのきつね以上のトリックスターであったことになります。ひよこはあひるに言います、「きつねおにいちゃんちよ。あたしと　いっしょに　いきましょ。」あひるはひよこに、「きつね？とおんでもない。がぶりとやられるよ。」ひよことあひるがうさぎに言います、「きつねおにいちゃんちよ。あたしたちと　いっしょに　いきましょ。」うさぎは、「きつねだって？とおんでもない。がぶりと　やられるぜ。」「きつねおにいちゃんは、かみさまみたいなんだよ」、きつねが陰で聞いているのを知っている、知っていてあひるがそう言ったとしたら、それこそしたたかなトリックスターということになります。

おおかみがやって来ます。おおかみを前にしたきつねの体に「ゆうきが　りんりんと　わいた」のは、太らせたひよことあひる、うさぎをおおかみに横取りされたくないからではありません。「そのばん。きつねは、はずかしそうに　わらって　しんだ」のです。「ふとらせてから」との魂胆を持ちながら（これが「はずかしそうに」）、それでもひよことあひる、うさぎを守って死んだ（これが「わらって」）ことに対する笑みなのです。

李錦玉・作・朴民宜・絵『さんねん峠』（岩崎書店）は、「さんねん峠」の言い伝えを語ります。「さんねん峠で　ころぶでない　さんねん峠で　ころんだならば　三ねんきりしかいきられぬ。」あれほど気をつけて歩いていたにもかかわらず、おじいさんは転んでしまいます。家に帰ったおじいさんは気落ちし、寝込んでしまうのです。そこへやって来た「すいしゃや」のトルトリが、「さんねん峠で　もういちど、ころぶんだよ」と、とんでもないことを言い出します。「一どころぶと、三ねんいきるんだろ。二どころべば　六ねん、三どころべば　九ねん。四どころべば　十二ねん」、まさしく逆転の発想です。

「えいやら　えいやら　えいやらや」、ぬるでの木の陰からおもしろい歌が聞こえてきます。うれしくなったおじいさんは、「ころりん　ころりん、すってん　ころり」と転ぶのです。先回りをして隠れ、歌っていたのがトルトリだったのは言うまでもありません。そのトルトリが水車屋であることに、円環としての水車と円環としての「運命の輪」とが重ね合わされているのです。

※うさぎのみみはなぜながい／北川民次・文・絵／福音館書店
※きつねのおきゃくさま／あまんきみこ・文／二俣英五郎・絵／サンリード
※さんねん峠／李錦玉・作／朴民宜・絵／岩崎書店

（英語教育講座）

■　転校生がやって来た！

一條　亜紀子

本屋さんでひときわ目立つ絵本でした。かわいらしい表紙と不思議なタイトルに興味を引かれました。読んでみると、人間関係を築く上で大切なことを教えてくれる深い内容でした。４月に新しい学級がスタートし、「学級の一員である自分」を考えるきっかけになればと思い、生徒たちに紹介しました。

「たかこが　ぼくの　がっこうに　やってきた。」

「ぼく」のクラスに来た転校生の女の子「たかこ」は、ちょっと変わっていました。十二単に扇、床につきそうなほど長い黒髪という姿なのです。鉛筆の代わりに墨と筆を使い、リコーダーの代わりに琵琶を鳴らします。「ぼく」と「たかこ」は隣同士の席になりました。「よろしく」という「ぼく」に、たかこは「こころやすくならむ」と返します。平安時代からタイムスリップしてきたような女の子です。

「たかこ」がどんな女の子かが書かれた物語の前半を読み聞かせしたところで、生徒に聞きました。「こんな女の子が転校してきたらどうかな？」

・・・「あり得ない。」という現実的な反応や、「おもしろそうな人だから、いろいろ聞いてみる。」という積極的な意見がある中で、「変わっているし、よく分からないからそっとしておく。自分からは話しかけない。」という意見が目立ちました。

そして物語の後半を読みました。

勉強のよくできる「たかこ」。テストはいつも満点です。ところがある日、他の子に負けてしまいました。くやしくて一日中不機嫌な「たかこ」に、クラスの子が言いました。「たかこちゃんて、いっつも　えばってる。」それを機に「たかこ」は、話し方をまねされたり、長い着物を踏んづけられたり…クラスの中で居場所を失ってしまうのです。

「たかこ」はこれからどうしたらいいのでしょうか？

学級遠足の日、皆が野原で思い思いに遊んでいると、急にあたりが暗くなり、雲行きがあやしくなってきました。突然の雷に大粒の雹。「かさ　さしちゃダメ！　かみなりに　うたれちゃう！」「おおきい　ひょうが　あたったらあぶないよ！」「たすけてーっ！」

そのとき,「たかこ」が自分の着物を広げて「わが　うはぎを　つかひたまえ！」皆は、色とりどりの着物の下に隠れました。

天気が回復し、皆は「たかこ」に感謝します。「たかこちゃん、ありがとう！」ぬれて重くなった着物を皆で学校に持ち帰り、広げて干しました。「きれいだね。」

なぜ「たかこ」はクラスの中で居場所を失ったのでしょうか。なぜそれを取り戻すことができたのでしょうか。

生徒たちに問いました。

・・・「最初は自分のことしか考えていなかった。」「皆の役に立つきっかけをつかんだ。」「皆のために勇気を出した。」「自分の良さ・個性を皆のために生かすことができた。」「周りを気遣うことができた。」生徒たちの考えに共通していたのは、「クラスのために、皆のために」でした。

中学生のこの時期、生徒たちは「自分」について深く考え始めます。自己理解や自己表現の力が身に付いていくと同時に、周囲の目が気になり、葛藤が生まれます。「たかこ」のように、自分の個性をありのままに出すことには抵抗があるのです。しかし、どんな個性かが問題なのではなく、大事なのは、どのように個性を出していくのかです。自分本位に振る舞っていた「たかこ」は孤立しましたが、クラスのために尽くした「たかこ」は認められました。周囲との関わりの中でこそ、自分を表現する方法を学ぶことができ、自分の立場や役割への意識が育まれるのです。

最後に、生徒たちに「自分にとってのクラスとは？クラスにとっての自分とは？」と問いました。

・・・「自分が成長する場所。お互いに高め合うメンバー。」「安心できる場所。自分はそういう場所をつくる一員。」「クラスは仲間。自分は仲間を支える存在になりたい。」

「たかこ」が経験した失敗や葛藤、克服を通して、生徒たちに学級の方向性が見えてきたようです。

※「たかこ」／清水真裕作／青山友美絵／童心社

（附属中学校教諭）

■　友達を作ることの大切さを教えてくれるこの一冊

奈良美智・文・絵『ともだちがほしかったこいぬ』（マガジンハウス）

中野渡　陽子

あるところに、さみしい想いをしている子犬がいました。「ぼくは　いつも　ひとりぼっちで　とっても　さみしかった。だれか　どっかから　やってきて　ともだちに　なってくれないかって　いっつも　おもってた。」さみしい想いをしている訳は、あまりに大き過ぎてみんなが「みっけられない」ことでした。あるとき、そんな子犬にひとりの女の子が気づいてくれました。女の子は大きな子犬の体をどんどんどんどん登っていきます。とうとう、頭のところまでやってきました。「あたまの　てっぺんまで　きたときに　すべって　ころんで　ごろごろ　どっしん！」女の子もびっくり、子犬もびっくり。二人は見つめ合い、微笑みました。「おんなのこは　いっぱい　うたを　うたってくれ」ました。「そうして、ぼくたちは　ともだちに　なれた」のです。

女の子は家へ帰りましたが、子犬はもう寂しくありません。女の子が「またね！！」と言ってくれたからです。「きみが　もしも　ひとりぼっちで　とても　さびしくても　きっと　どこかでだれかが　きみとであうのを　まってるよ　だいじなのは　さがすきもち！」大き過ぎて誰にも気づいてもらえなかった子犬は、「さがすきもち」があったからこそ、こうして女の子と友達となることができたのです。

この本の作者、奈良美智（ならよしとも）は私と同じ青森出身です。青森県立美術館に行ったことがきっかけで、この本を知りました。この本の大きな子犬は、「あおもり犬」という美術品として展示されています。その大きな犬との出会いが印象に残りました。女の子の目つきに特徴のあることがわかります。特徴のあるその目は、子犬の目でもあることがわかるのです。ユニークな女の子とユニークな子犬、友達のいなかった二人が友達となるこの絵本は、友達を作ろうとすることの大切さを教えてくれるのです。

（なかのわたりあきこ：　視覚障害教育コース３年）

■　新刊紹介

ジャン・オーメロッド文・フレヤ・ブラックウッド絵『モーディとくま』（岩崎書店）

「たまには　うんどうしなくちゃ　いけないわ・・・じてんしゃに　のるのは、どう？」女の子モーディがくまを誘います。それでいて、「サングラスを　していかなきゃ」「ぼうしを　かぶっていかなきゃ」「スカーフも　ひつようね」と、さんざんくまを待たせての出発。「うんどうって　ほんとうに　いいわよね」、そう言うモーディは、急な上り坂をくまが漕ぐ自転車のバスケットに。（「じてんしゃのり」）

モーディがくまの家へと入り込みます。テーブルのおかゆを食べ、椅子に座ります。そこへくまの家族が戻ってきます。それを知ったモーディ、「ここ、あの　かぞくの　おうち　なんだわ」手にした絵本『三びきのくま』通りの展開です。「おかえりなさい、おかゆをたべる？」とくまが聞くのも、モーディがおかゆを食べてきたからと言えます。「わたしの　おきにいりの　いすが、ほかのだれかに　とられちゃったら　どうしよう！」と心配するモーディを、「だいじょうぶ。ぼくは　きみのいすを　とったりしないよ」とやさしく包んでくれるのです。（「おかえりなさい」）

「おやつを　つくりましょう」、モーディはそう言いながら、一緒に作ろうとしません。作るのはくまなのです。「メイプルシロップを　かけてね」「ナッツも　ちゃんといれてね」「はちみつも　ちょびっと　たらしてね」と注文ばかり。用意がすっかり整うと、今度は、「かんぺきすぎて、たべられない」とまた注文。それでもくまは、「おなかが　すくまで、まてばいいさ」どこまでもくまはやさしいのです。（「さんじのおちゃかい」）

ダンスをするモーディを見て、くまが笑い出します。怒ったモーディは部屋に籠ります。「なかなおりしたいな　とおもって」、やってきたくまにモーディはドアを閉ざしてしまいます。「チョコレートのビスケットを　もってきたんだ」、それでもまたドアを閉ざしてしまうのです。「ぼくと　いっしょに　おどって　いただけませんでしょうか」、またまたやってきたくま、ここでは求めるのがくま、他と逆になっているのがわかります。だからこそ、モーディがしたいと思っている、強く思っていることなのがわかるのです。モーディはくまと「つきの　ひかりに　てらされて　ルンバを　おどり　ジルバを　おどり　サルサを　おどる」のです。（「なかなおり」）

モーディはくまのぬいぐるにひもをつけ、引いています。そのぬいぐるみに、こうしましょう、こうしてちょうだいといつも言葉をかけている、とすれば、くまはモーディの注文や願望が形をとって大きくなったものと考えることができます。すべてがぬいぐるみを相手に見たモーディの夢なのかもしれないのです。

（藤田　博）

発行：宮城教育大学附属図書館